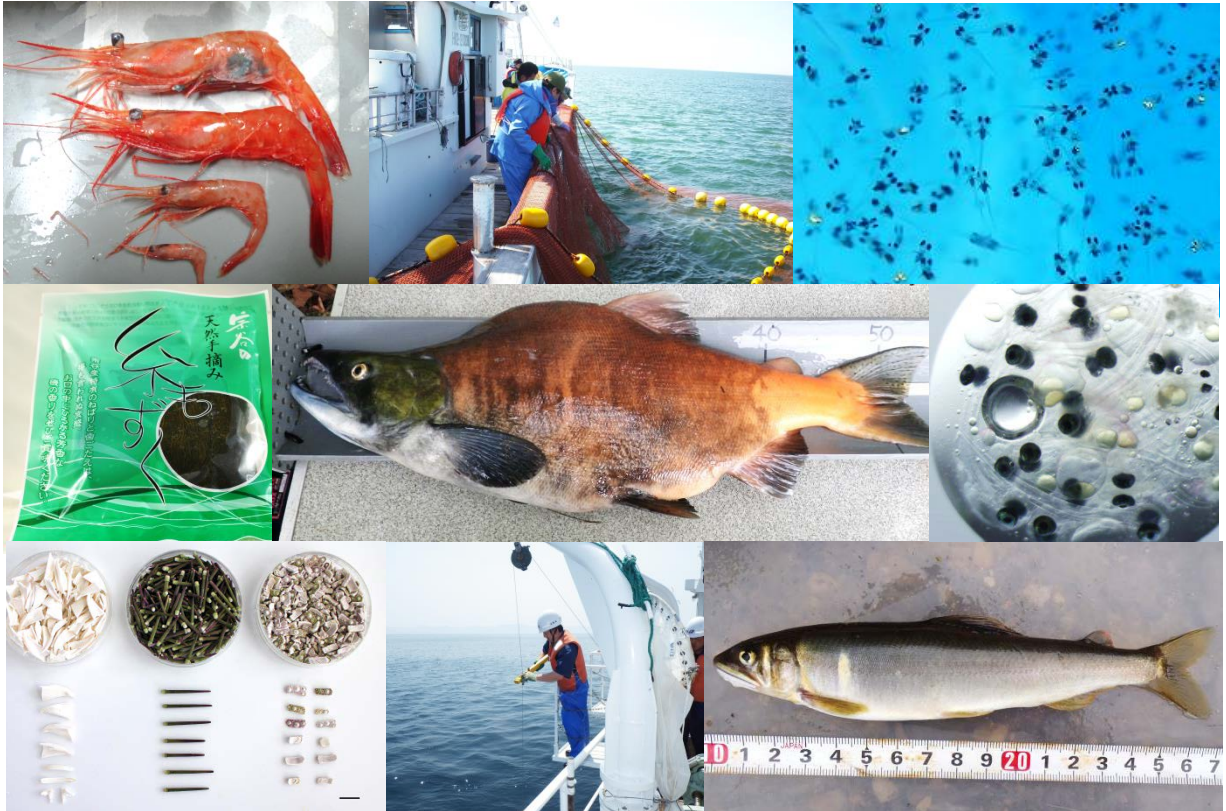




平成28年度 水産研究本部成果発表会 のご案内

当本部が取り組んでいる研究開発や研究成果を広く皆様に公開し、ご活用いただくため次の通り『水産研究本部成果発表会』を開催いたします。多くの皆様にご来場いただきたくご案内申し上げます。



●日時 平成28年8月9日 (火)
10:00~16:40 (9:30受け付け開始)

●会場 第二水産ビル8階 会議室

札幌市中央区北3条西7丁目 TEL:011-281-2071

* 駐車場はご用意していませんので、公共交通機関をご利用願います。

●プログラム

| | | |
|-------------|--------|-----|
| 10:00~10:10 | 開会挨拶 | |
| 10:10~12:05 | 口頭発表 | |
| 12:05~13:30 | ポスター発表 | 第1部 |
| 13:30~15:35 | 口頭発表 | |
| 15:45~16:40 | ポスター発表 | 第2部 |

**参加
無料**

| 時間 | 発表課題名 | 発表者 | 発表概要 |
|--------------------------|---|---------------------------------|--|
| 1 10:10 ～ 10:25 | サケ稚魚の放流サイズを再考する －種苗特性を考慮した放流サイズの検討－ | さけます・内水面水産試験場 主査 下田 和孝 | 本道のサケの放流事業では、骨格形成などが進み回帰率が高まるとされる体重1g以上に育てた種苗の放流を目標としてきた。本研究では、種苗の成長に伴う形態や体色、海水適応の変化を調べ、初冬に回帰した親魚に由来する種苗は秋季回帰のもの比べて海洋生活に向けた銀毛化の進行が早いという特性を見出した。種苗特性には河川による違いも見られたことから、放流サイズは回帰時期や地域毎に検討する必要があると考えられた。 |
| 2 10:25 ～ 10:40 | サケ稚魚の放流適期を探る －太平洋東部地区のサケ資源回復に向けた放流方法の検討－ | さけます・内水面水産試験場 研究主任 實吉 隼人 | 近年、太平洋東部地区ではサケ資源が低迷し、その原因の究明と資源回復方策の検討が急務である。サケの資源量には海洋生活初期の減耗が影響することから、当地区の釧路川において稚魚の標識放流を行い、放流後の移動時間や沿岸域での分布状況を調べた。本研究から、放流時期により稚魚の降河日数が異なること、沿岸での稚魚の分布が海洋環境の影響を受けることなどが明らかとなり、放流効果を改善するための知見が得られてきた。 |
| 3 10:40 ～ 10:55 | 釣ってよし 食べて良しのヒメマスが多様な生きざまにせまる －3つの湖のヒメマスの生態と生息環境－ | さけます・内水面水産試験場 研究主幹 中島 美由紀 | ヒメマスは、ベニザケのうち一生を淡水で過ごす陸封型とよばれるタイプの魚で、チップの名で湖沼の釣りに親しまれています。その資源の維持安定を目指して、資源と生息環境のモニタリング調査を実施しており、資源を支える稚魚の放流や生息環境との関係を明らかにしてきました。ここでは、ヒメマスの資源動向、成熟産卵と摂餌と水質環境などから、道内の3湖沼でのそれぞれの多様な生態を紹介します。 |
| 4 11:00 ～ 11:20 | 子供を毎年安定して得るために！ －キツネメバルの人工授精技術開発－ | 栽培水産試験場 研究職員 川崎 琢真 | キツネメバルは、雄の精子を受け入れた雌の体内で卵が受精して、仔魚になってから体外に放出される。このような繁殖様式を持つことから、キツネメバルの種苗生産用の親魚は天然妊娠魚又は飼育下での自然交尾魚に頼っている。しかし、現状では生まれて見なければ受精しているか分からず、仔魚の確保は不安定である。そこで本研究では、キツネメバルを人工的に妊娠させるための人工授精技術の開発を試みた。 |
| 5 11:20 ～ 11:40 | 大海原に旅立つ水槽育ちのキツネメバル －キツネメバルの放流技術開発－ | 栽培水産試験場 主査 高畠 信一 | 釣りで漁獲された成熟親魚を水槽で産仔させ、仔魚を飼育水槽に密度調整して収容し、放流サイズ（約5cm）まで飼育した。これらの種苗はせたな町大成区の漁港から放流し、放流魚の一部には、放流年が記された外部標識を装着した。この標識魚の再捕情報から放流後の移動や成長を把握した。また、漁獲物に含まれる放流魚の割合をDNAを用いた親子判別により調査したところ、25%以上の高い割合を示した。 |
| 6 11:40 ～ 11:55 | キツネメバルの資源増大を目指して －キツネメバル栽培漁業の今後の展望－ | 栽培水産試験場 研究部長 森 立成 | キツネメバルは、主に日本海海域に棲息する根付きの魚であり、特に大型魚は値段が高く、味はソイ類の中でも最も評価が高い。現在、第7次栽培漁業基本計画では事業推進種に指定されている。本種の栽培漁業を今後さらに推進させるには、種苗生産技術、漁場造成を含めた放流技術、資源管理方策の3つが重要なキーワードになると考えられる。今回は、本種の栽培対象種としての特性を再整理し、今後の栽培漁業の展望について考えたい。 |

口頭発表

| 時間 | 発表課題名 | 発表者 | 発表概要 |
|---------------------------|--|---------------------------------|---|
| 7 13:30 ～ 13:45 | ミニ大洋と呼ばれる日本海で今なにが起きているのか？ －道西日本海における海洋環境の特徴と変動要因－ | 中央水産試験場 研究職員 佐藤 政俊 | 日本海は地理的特徴から気候変動の影響を受けやすく、環境が複雑に変化する事が知られている。水試では、1989年から試験調査船による水温・塩分・栄養塩・プランクトンのモニタリング調査を実施している。その結果、道西日本海の中深層及び沿岸では水温が上昇傾向にあり、温暖化の影響がいち早く現れていることが示唆された。また同時に10年周期程度の変動や、月から年程度の短い時間変化も数多く存在する事が明らかとなった。 |
| 8 13:45 ～ 14:05 | スケトウダラはなぜ減ったのか？ －スケトウダラ資源の変動と海洋環境－ | 函館水産試験場 主査 渡野 邊 雅道 | 日本海におけるスケトウダラ資源量は、1990年頃から右肩下がり減少を続け、現在は極めて低水準にある。この資源の減少は、稚魚の生残率の低下により加入量（子供の量）が減ったことに始まり、その後少ない資源に過剰な漁獲圧がかかったことによるものと考えられた。また、資源が減少し始めた1990年代以降は沿岸水温が高温化するなど、資源の変動には水温や流れなどの海洋環境の変化が関わっていることが示唆された。 |
| 9 14:05 ～ 14:20 | 日本海の甘エビ（ホッコクアカエビ）に何が起きているのか －ホッコクアカエビ資源の変動要因と深海の環境－ | 釧路水産試験場 主査 山口 浩志 | 日本海におけるホッコクアカエビは、数少ない安定した資源であったが、近年、漁獲量の減少、漁獲物の小型化が進行しており資源状態の悪化が懸念されている。モニタリング結果の解析から、稚エビの生残率（RPS）の低下による加入量の減少が、資源量減少の一因であることが明らかになった。また、RPSと日本海の水深300m以深の水温との関係から、水温の上昇がRPSの低下に何らかの影響を与えている可能性が示唆された。 |
| 10 14:20 ～ 14:40 | 環境変化に翻弄される日本海の底魚資源 －ニシン資源増加の背景からみえる資源管理方策の出口－ | 中央水産試験場 研究主幹 星野 昇 | 日本海で続けてきた試験調査船の調査や漁獲動向の分析から、多くの底魚では資源量が卵・仔稚魚期に海洋環境の影響を大きく受け変動していることがわかってきた。タラ類、ホッケ、ハタハタなどの資源量が軒並み落ち込むなかで、石狩湾系ニシンでは高水準が続いている。海洋環境の好機と若齢魚保護の取り組みとの相乗効果が資源増加の背景にあり、そこには日本海における底魚資源との「つきあい方」の未来像がみえる。 |
| 11 14:50 ～ 15:05 | 放流されるアユはちゃんと生き残っているの？釣られているの？ －放流アユの添加効果と釣獲実態－ | さけます・内水面水産試験場 主任研究員 三坂 尚行 | 本州産人工アユ種苗が遊漁のために放流されている2河川で、天然魚と放流魚の採捕調査および釣り人への聞き取り調査を行いました。その結果天然魚の豊富な河川では放流魚はほとんど採捕されませんでした。天然魚の少ない河川では放流魚も天然魚と同等の成長を示しており、採捕割合も多く、高い割合で釣獲されていました。しかし両者の産卵は重なる期間があるため、交雑による再生産への影響に注意する必要があると考えられました。 |
| 12 15:05 ～ 15:20 | ウニ殻のお家で微生物を育てて、水をキレイに！ －ウニ殻由来の生物ろ過材の有効性－ | 釧路水産試験場 主査 秋野 雅樹 | 北海道では生殖巣除去後のウニ殻が廃棄物として大量に排出されていることから、その有効利用が望まれている。本研究では、ウニ殻の材質および構造的特徴を生かした骨片素材を開発し、生物ろ過において重要な役割を果たす硝化細菌の培地（ろ過材）としての利用を検討した。その結果、ウニ殻由来のろ過材は高い硝化能力を有することが示され、ウニ殻がろ過材としての適性が高い、非常に優れた素材であることが明らかとなった。 |

口頭発表

| 時間 | 発表課題名 | 発表者 | 発表概要 |
|---------------------------|--|---------------------------|---|
| 13 15:20 ～ 15:35 | 宗谷発、イシモズクの 新たなブランド化 ー宗谷モズクを用いた 冷凍食品の開発ー | 中央水産試験場 主任研究員 成田 正直 | 地元向け塩蔵品のみの利用に限定されていた宗谷産イシモズクのブランド化に取り組みました。滅菌海水を用いた洗浄方法、変色防止のための鮮度保持法の検討、機能性成分の分析による情報付加などにより、新たな冷凍食品を商品化しました。現在、高級食材としてネット販売や飲食店で利用されています。 |

ポスター発表（1部 12:05～13:30 2部 15:45～16:40）

- ✓ 全ての口頭発表者が、ポスターでも詳しく研究成果を説明します。
- ✓ 研究員と1対1の交流です。ご意見・ご質問に対して丁寧に対応します。
- ✓ 口頭発表を聞き逃しても、ポスター発表で説明を聞くことができます。
- ✓ お忙しい方には、短い時間で研究成果を知るために、関心のある口頭発表とポスター発表を組み合わせる参加方法をお勧めします。



倶多楽湖

●お申込方法

- ・電子メールあるいはFAXにてお申込下さい。
 - ・電子メールによるお申込は、所属・企業、職・氏名、住所、電話番号、メールアドレスを記載し、次のアドレスに送信して下さい。
- なお、申込用紙はホームページからもダウンロードできます。

●お問い合わせ・お申し込み先

水産研究本部企画調整部企画課

TEL: 0135-23-8705

FAX: 0135-23-8720

E-mail: sasaki-noriko@hro.or.jp

お申込締切日
8月1日(月)